

土木現場の映像を撮り、継承しよう



塚田幸広
論説委員会 幹事
(公社) 土木学会専務理事

ハツ場ダム、外かく環状道路、首都圏外郭放水路等の大規模プロジェクトの現場あるいは完成後の空間を観光資源とするインフラツーリズムが盛況である。また、土木の日に関連して土木学会各支部や建設業界等が開催している親子現場見学会もすぐに定員一杯となる。多くの市民が現場を訪問し、土木やインフラに興味を持つことは、大変喜ばしい。

しかしながら、さらに多くの市民や子供たちに土木・インフラの魅力を伝え・広げるためには映像・映画（以下、映像と略す）を活用することが重要であろう。映像は、現場ほどの臨場感を伝えることはできないが、最近ではドローンを駆使することにより上空からプロジェクト全体を鳥瞰でき、解説やアニメーションを挿入することにより、工法の原理などを平易に説明することができる。また、映像を WEB に公開することにより国内外に発信できるとともに、アーカイブとして保存することにより、いつでもどこでも気軽に何度でも、繰り返し観ることができるといった長所がある。以下では、いくつかの事例を紹介しつつ土木・インフラの魅力を伝えるための映像の活用を述べてみたい。

「ドリームビッグ」と「テクノパワー」に見る映像の可能性

米国土木学会では、次世代の土木技術者の育成を主な目的として、米国最大手のゼネコン等のスポンサーを得て“Dream Big -Engineering Our World-”という映画を製作し、米国内外の大型スクリーンで上映している。この映画は、上映時間は 42 分で、4 人のナビゲーターが、それぞれ万里の長城、世界最高水準の高層ビル、水中ロボット・太陽光発電車及びスマートで持続可能な都市をテーマとして、土木技術が持つ技術力と背後にある人間の創造力を迫る映像を生かして解説している。米国土木学会によると、子供たちや若手技術者の反響から確かな手応えを得ているようである。

この米国土木学会の映画の話題に触発され、先日 1993 年に放映された NHK の「テクノパワー」全 5 話を改めて観た。「テクノパワー」は、ダム（宮ヶ瀬ダム、三峽ダム）、長大橋梁（明石海峡大橋、フォース鉄道橋）、洋上空港（関西国際空港）、海底トンネル（東京湾アクアライン、英仏海峡トンネル）及び巨大都市など、当時の国内外の巨大プロジェクトを実現する土木技術につ

いて、建設現場の映像と松平定知アナウンサーの絶妙な語りなどにより、土木・インフラの意義・役割を伝える番組である。現在でも、その番組の新鮮さと説得力を感じつつ、1993 年当時、首都圏の高規格幹線道路の計画を担当し、インフラの意義、役割を国民、市民に理解してもらうことに苦慮していた著者にとってこの「テクノパワー」の番組から大いに元気づけられたことを思い出した。

土木学会での映像の取り組み

土木学会では、「ドボ博」と称して、インフラの魅力を独自の映像と視点により WEB 上で公開している。これまで、東京と四国を公開している。東京については、道路、鉄道などの各インフラの役割を大胆に人体の臓器に例え紹介しており、公開から 2 年間のアクセス数は約 50 万回を超えており好評である。また、東京地下鉄（株）の依頼により、銀座線の開通 90 年を記念する映画「日本初の地下鉄建設」を製作した。この映画は当時の人力主体の建設の状況や東京市電が走る都市風景の映像に加えて、開削工法の施工手順のアニメーションも織り込んだ構成となっており、(公社)映像文化製作者連盟が主催する「映文連アワード 2018」のソーシャル・コミュニケーション部門・部門優秀賞を受賞した。

一方、土木学会では、1964 年から 2 年ごとに土木学会映画コンクールを実施しており、これまで多くの映画がノミネート・受賞している。過去の受賞作には、例えば、「関門橋（1974）」、「本州四国連絡橋 長大橋の基礎を築く（1984）」、「余部橋りょうさらなる 100 年へ（2010）」などの現場映像を主体としたものが多数ある。しかしながら、応募数は 1996 年の 98 件をピークにここ数年の応募数は 5 件程度と寂しい状況である。今後は、特に、大規模プロジェクトの発注者、受注者双方に土木現場の映像を撮り、継承することを強く提案していきたい。また、近い将来、貴重な映像を活用した「日本版ドリームビッグ」を立ち上げたいものである。

最後に余談であるが、先日、ドイツの標高約 3000m のツークシュピッツェの山頂を 10 分で結ぶロープウェイに乗り、頂上駅を訪問した際、当時の厳しい作業環境でタワーを建設しケーブルを張るなどの作業風景の映像を公開し、それを観光客・スキー客が興味深く観ている光景に遭遇した。インフラの完成後もその空間でユーザーに対して、建設当時の様子を映像で映し出すことは、土木・インフラへの理解につながるものと感心した。我が国でも、一般市民に「土木の魅力を伝える」ように様々な事例を参考に、具体的インフラを舞台に実践するよう行動したいと考えている。